

絵本を題材にした幼児対象の対話型劇場実践 ～「パンをとったのは誰だ～!?!」～

九州大谷短期大学幼児教育学科2年

大田 杏・大薮 桃加・岡 紗衣・

塩塚 彩夢・篠原 ひなた・高倉 潮菜

成田 梨杏・原 ゆきみ・原武 玲菜

山口 愛可

1. 実践の概要

題材とした絵本：『パンどろぼう』

文・絵:ケイコ・柴田 出版:KADOKAWA

実践のタイトル：「パンを取ったのはだれだ!?!」

実践準備の担当：総合責任者（大薮 桃加）、脚本（大薮 桃加、高倉 潮菜、山口 愛可）、
大道具（原武 玲菜、成田 梨杏）、衣装（個人）、音楽（岡 紗衣、原 ゆきみ）、記録（高倉 潮菜）

実践時の担当：パンどろぼう（山口 愛可、大薮 桃加）、パン屋のお姉さん・村人（成田 梨杏、原武 玲菜）、魔女（大田 杏）、音・演奏（岡 紗衣、原 ゆきみ）、裏方（塩塚 彩夢、篠原 ひなた）、ナレーション（高倉 潮菜）

2. 題材について

『パンどろぼう』の絵本は、パンが大好きでおいしいパンを求めてパン屋で盗みを繰り返す物語である。ある日世界一美味しいパンと書かれたパン屋で盗みを働き、食べた。しかし、そのパンはまずく、パンどろぼうはカンカンに怒ってしまった。パン屋の店主に言いに行くとパンどろぼうは店主に盗みは良くないと言われたが、先に、おいしくないパンを作ったことを謝った。そして、盗みをしたパンどろぼうを叱るのではなく、優しい顔でパンどろぼうであるねずみにも盗んだことに対する謝罪を求めている、店主は悪いことは怒らずに丁寧にパンどろぼうに教えていて、その後店主から一緒に世界一美味しいパンを作らないかと誘われて今まで世界中の美味しいパン盗んで食べてきたパンどろぼうが世界一美味しいパンを作るというお話である。

内容も面白く、この絵本を読んだことがあったり、知っている人も多く親しみやすい内容であることと、話の内容が就学前の子どもたちにも充分理解でき、内容を楽しむことが出来ると思い選択した。物語の中で、パンを盗みにはいる時にパンに隠れる所で堂々とパン屋のお姉さんたちを煽ってみたり、後ろで大きな音を立てたり、クルクル回りながら後ろを通過してみたりするなど、色んな楽しくなるような動きをして、観客の子どもたちに見つけて貰ったりするようにアレンジをすると、子どもたちに「あ！あそこにいる」と見つけて貰って、楽しん



でもらったり、興味を持ってもらえると考えた。また、盗んだパンを食べたパンドろぼうが「まずい」とショックを受けている場面は、ショックで絶望している様子を膝から崩れ落ちたり、全身を震わせるような表現と、絶望をした時の音楽を合わせると見ていて面白いと考えた。「パンドろぼう」は「ドジで失敗しながらも頑張る主人公」を描いているようで、子どもたちには「好きなこと、夢中になれることを見つけて、諦めないで」と作者の柴田ケイコさんが絵本への思いを語っている。今回の実践を通して、パンドろぼうが好きなことを頑張っている姿を見て、たくさん失敗してしまっても好きなことに挑戦して欲しいという作者の思いも伝わって欲しいと思い、幼教こども劇場の実践題材として『パンドろぼう』を選択した。

(執筆者：山口 愛可)

3.絵本の世界から遊びへの展開

『パンドろぼう』と言う絵本を元にして、パンドろぼう役とパン屋のお姉さん役を考えた。また、子どもたちの劇への参加を増やすために魔女役を作った。

絵本のストーリーでは、最初に「世界一おいしいパン屋さん」からパンドろぼうがパンを盗んだ後、そのパンを食べると美味しくなかったため「まずい」と叫ぶ。パンドろぼうはパン屋さんに「パンが美味しくない」と抗議をして、2人でとても美味しいパンを作り、2人のパン屋は大盛況になるという話だった。最初は別の絵本を元に考えていたため、劇の内容を考えることが遅れてしまった。ほかのグループより遅れている中でも、体を使って好きなパンを表現したりすることや、「あんぱんしょくぱん」の手遊びを取り入れることで、絵本から遊びとして変えた。体を使って表現することで、体の動きを自然に促すことができるため、身体表現の遊びにつなげた。手遊びでは、身体表現に加えてリズム遊びにもつなげるために取り入れた。パン屋さんやパンドろぼうが子どもたちに話しかけに行くことで、パンドろぼうと子どもたちの会話を増やし、自然に劇に集中できるようにした。作品を遊びに変えるためにさらに工夫したことは、パンドろぼうとパン屋さんが追いかっこをすること、パンドろぼうが急に座席後方から現れて子どもたちたちの近くに行くことだった。パンドろぼうとパン屋さんが追いかっこをすることでは、絵本の中の話を実演しながら客席の人たちの笑いを出した。パンドろぼうが座席後方から子どもたちの近くに行くところでは、子どもたちに「何のパンなんだ？」と質問することで身体表現の遊びを促した。『パンドろぼう』の絵本では、読者が隠れているパンドろぼうを探すという遊びがあるので、そこはパンドろぼうとその手下がパン屋さんに見つからないように出てくるという形にした。子どもたちがパンドろぼうを見つける展開が必要だと考えたため、パンドろぼうがパン屋さんの後ろを走り回ったり、少し顔を覗かせたりした。子ども同士やパン屋さん、パンドろぼう達との関わりにつなげるためにも行った。

(執筆者：大田 杏)

4.実践に際して大切にしたこと

まず、幼教こども劇場でこの作品を実践するにあたって大切にすることは、会場に来てくれた子どもたち全員がこの作品を通して「楽しかったな」、「来て良かったな」等と心から楽しんで満足することができるような作品にするということだ。これを実現するために、子どもたちにどのようなことを体験して欲しいのか、楽しんで欲しいのかをグループで深く話し合い何度も試行錯誤した。その結果、子どもたちに体験して欲しいのは自分自身の身体を使って表現することや発言することではないかという意見が集まった。身体を使って表現することで、自分の身体の形を変えることによって様々なものを多く表現することができるということに子どもたち自身が実際に身体を使って表現をして体験を通した上で自ら気付くこ

とができ、身体を使って表現することの楽しさにも気付けるのではないかと考えた。また、発言することで言葉のやり取り（会話）の楽しさにも改めて気付けるのではないかと考えた。そのために配慮したことはこの作品の中に身体を使って表現する場面を取り入れ、「自分の好きなパンの形を身体を使って表現してね」と客席側の子どもたちに問いかけをすることにより、客席側の子どもたち全員が好きなパンの形を身体を使って表現することができる場面を作ったり、子どもたちが何のパンの形になっているのかを聞いたりして子どもたちが自然に発言できるような環境にしたことだ。その他にもグループの話し合いの中では多くの意見があり、パンを作る際に材料の1つが足りない等という設定で子どもたちの後ろ（客席側の後ろ）にその材料があり、それを子どもたちに後ろから前まで届けてもらい、パン作りが始まるといったもの。数人の子どもたちに前に出てきてもらい、舞台上がって自分の好きなパンの形を身体を使って表現して客席側にいる子どもたちに当ててもらおう等、多くの設定を検討した。後ろから前まで材料を届けてもらう設定では、材料が来ず、触れない子どもたちが出て来てしまう可能性があること。舞台上数人の子どもたちに自分の好きなパンの形を身体を使って表現してもらう設定では、舞台上がれる子どもの人数は限られてくるため、舞台上がれなかった子どもたちが出てくること。そのような点から、全ての子どもたちが平等に楽しめる設定を考慮し、長い検討を得て実践に至った。



(執筆者：原 ゆきみ)

5.実践内容について

(1) 全体の構成

※ 〈曲名〉 《作中の役》

①パンドロぼうの登場

- ・黒幕が降りた状態で〈ピンクパンサー(オリジナル)〉が流れ始める。
- ・《パンドロぼう1・2》が曲に合わせて、周りを見渡しながら登場する。
- ・《パンドロぼう1・2》は自分がパンドロぼうであることを告げ、美味しいパンを捜し求めて舞台袖にはける。
- ・言葉の最後に決めポーズを作り面白さを取り入れる。



②パン屋の開店準備

- ・パン屋の開店準備を始める《パン屋のお姉さん2人》が登場する。
- ・お店の開店は明日だが、何を作ろうか迷っている。
- ・真剣に悩んでいる姿を見せ、ハッと何かを思いついたような素振りを見せる。
- ・客席側を見渡し、子どもたち(客席)に好きなパンは何かを聞く。(舞台をおり、客席側へ)
- ・教えてもらったものを復唱しながら何を作るか考える。
- ・みんなが教えてくれたパンを作りたいが、どんな形であるか忘れてしまったことを伝える。
- ・そのパンがどのような形であったのか皆に訪ね、身体を使って表現してもらう。
- ・そのために立つように促す。
- ・「みんな～準備はいい？行くよ～3、2、1、パン！！！」と掛け声をする。
- ・掛け声をするので立つことに余裕を持たせ、それぞれが自分のタイミングで形になれるように待つ。
- ・お姉さんたちは形を覚えておくために絵を描き、記録に残しておくように促すが、紙とペンを忘れてしまう。
- ・紙とペンを取りに行くため、パンの形のまま待ってもらうことを告げ《パン屋のお姉さん2人》はそれぞれ慌てた様子で舞台袖にはける。



③パンドろぼうが美味しいパンを探し求める

- ・《パンドろぼう1・2》は客席側後方から〈ピンクパンサー(オリジナル2)〉の曲で登場する。
- ・階段、段差をおりながら、「美味しそうだな」「何パン？」などパンの形になった子どもたちや客席に尋ねる。
- ・〈あんばんしょくぱん〉の手遊びをしながら壇上にあがり、一緒に歌うように伝える。
- ・声が小さいことを伝え煽りを加える。
- ・子どもたちに座るよう促す。
- ・《パンドろぼう1・2》は世界一美味しいパン屋を見つけ覗く。(はける)

④パンを作る

- ・ペンと紙を持ってきた《パン屋のお姉さん2人》が戻ってくるも、パンの形のまま待っててと言ったはずのみんなが座っていることに気づき、これはチャンスだとばかりにパン作りの基本である食パン作りをする。



・パン作りの流れ(小麦粉→砂糖→塩→魔法の粉→バター→牛乳)をボールに入れる(見立て作業)

・みんなで一緒に材料を混ぜ生地を作る。

(手をぐるぐるしながら混ぜる動作)

・その時、《パンどろぼう1・2》は、《パン屋のお姉さん2人》に見つからないように顔を出したり、動いたりする。(煽りを取り入れ楽しんでもらう。)

⑤”パンどろぼう”の名前と掛け、パンを盗む

・出来上がったパンが机の上に置かれたことを確認するとパンどろぼうはそのパンをパン屋のお姉さんに見つからないように盗んでいく。

・それに気づいた《パン屋のお姉さん2人》が《パンどろぼう1・2》を追いかける。

・パンどろぼうは山の奥まで逃げる。

・逃げ切ったと思ったパンどろぼうは、そのパンを食べるも、とても不味い。

⑥美味しいパンに変える魔法の登場

・それを聞いた魔法が登場する。

・魔法は美味しくなる魔法をかけてあげましょうと提案する。

・魔法の存在自体を疑っているパンどろぼうは魔法の美味しくなる魔法に疑いをかける。

・魔法は悪い魔法ではないことを精一杯伝え、子どもたちにも手伝ってもらって魔法をかける

・そのおかげでパンは以前食べたパンと比べ物にならないほど美味しくなっている。

⑦美味しさの共有

・それを聞きつけた村人達が登場する。

《パンどろぼう1・2》はパンの美味しさを声を聞きつけた人々にパンを譲り渡し、美味しさを共有する。

⑧パンどろぼうのその後

・《パンどろぼう》はパンどろぼうを辞め、パン職人となることを決意する。

・悪さをやめたパンどろぼうはパン屋を開くことを子どもたちに伝える。

・パン屋に招待した時に来てくれるか？と尋ね会場の人たちを新しいパン屋さんに誘う。

・幕が降りる。物語の終わり。



(執筆者：原武 玲菜)

(2) 子どもたちとの対話について

今回の作品を通して、子どもたちとの対話をそれぞれの役が出てくる場面で行った。①パン屋のお姉さんとの対話、②パンどろぼうとの対話、③魔法との対話である。

①パン屋のお姉さん2人との対話では、パン屋のお姉さんたちが子どもたちに対して「好きなパンは何？」と質問をし、舞台上から子どもたちと対話をするのが前日まで考えていた事だったが、当日子どもたちの人数が少ないことを知り舞台上で質問をして聞くだけでは難しいと思い、舞台上から客席に降りて、直接子どもたちに「何のパンが好き？」と質問をすると子どもたちが「メロンパン」、「カレーパン」など答えてくれて舞台上という離れた位置から質問するのではなく、客席に降りることで子どもたちとの距離が近くなり大きな声が出せなくても子どもたちが自然に声を出すことが出来ることに気づいた。好きなパンを体で身体で表現するところでは、パン屋のお姉さんたちがパンの形を忘れたと伝えら身体を使って教えて欲しいとお願いすることで子どもたちが自分の好きなパンがどんな形なのか考えつつ大きな丸の形を作ったり、細長い形だったりとパンの形を表現した後にパン屋のお姉さんたちが反応することで、自分のパンの形を見てくれているんだと子どもたちが感じられるように工夫した。



②パンドろぼう1とパンドろぼう2との対話では、登場してくるところからキメポーズをしたりすることで子どもたちが興味を示すことが出来るようにしていた。パンドろぼう1・2が客席の後ろから現れ、パンの形を身体で表現している子どもたちに対して「何パン？」や「何のパンが好き？」など質問を行い、子どもたちが自分の好きなパンを答えたり、「あんぱん 食ぱん」を歌い始めたパンドろぼう1・2と一緒に手遊びをしたりと楽しみながら歌う姿が見られた。パンドろぼうたちの動きに笑っていたり、最後のパンドろぼうたちからの「パン屋に来てくれる？」という問いかけに対して最初は恥ずかしそうに答えていたが、「聞こえないな？」とパンドろぼうから聞き返されたことで大きな声で「いいよ」と声を発していた姿をみて、こちら側が聞き返すことで小さい声では聞こえないと子どもたちが感じ、大きな声を出すことが出来たのではないかと思った。

③魔女との対話では、美味しくないと美味しくなる魔法をかけるという部分だけだったが魔女から「一緒に魔法をかけてくれる？」という言葉掛けに対して「いいよ」と元気に応えている姿をみて、「～してくれる？」という言葉掛けをすることで子どもたちが一緒に参加出来ると感じられるように伝え方を工夫した。

(執筆者：成田 梨杏)

(3) 演出の工夫

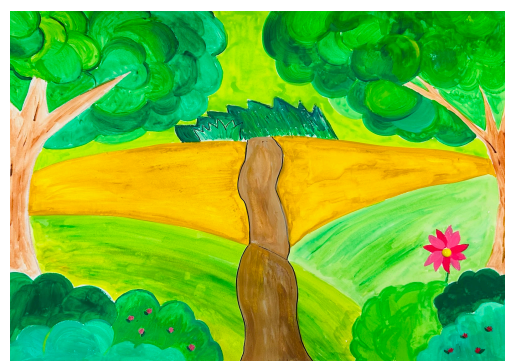
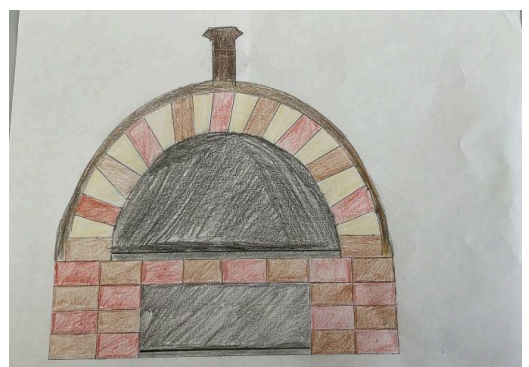
この作品を作り上げていく上で意識したことは、その場所の舞台背景を分かりやすくすることだ。内容に沿うように登場人物はそれぞれ服装を変え、舞台上のパネルや机、背景映像なども「パン屋さん」であることが分かるように工夫した。

(パン屋のパンのパネル↓)

服装に関してはそれぞれ持参し、被り物は一から作り上げたものを使用した。パン屋のお姉さんは見た目から分かりやすいようにエプロンにバンダナを着用した。パンどろぼうの食パンを被ったねずみと手下であるねずみの被り物を作ることによって話を分かりやすく目づ、イメージしやすくした。主な登場人物であるパンどろぼう1、2とパン屋のお姉さん2人は舞台上を駆け回るなど動く場面が多々あるため、動線も意識しながら小道具作りをした。



まず、黒幕が降りた状態で話は始まる。左右の舞台袖からパンどろぼうが出てくるが、さらにドキドキ感を加えるためそこにピンクパンサー(オリジナル)の曲を入れた。パンどろぼう達が美味しいパンを捜し求めてはけて行くところから黒幕を開けることで場面の変わりを表現した。場面が変わることが分かるように舞台上にいる人物たちは横にはけていく。パン屋のお姉さんたちは明日が開店日という設定のもとパン作りをしていく。その中で子どもたちとの対話を取り入れ、そこがパン屋さんであることが分かるように、話に入り込めるように対話を取り入れつつ進めた。その後の場面でパンどろぼうが会場後方から出てきたのは、前方の舞台に集中しているであろう子どもたち・観客に驚いてもらい、パン屋の雰囲気だった会場に変化を入れるためである。後ろから登場することで子どもたち・観客は後ろを振り向く。そこから段々とパンどろぼうたちが自分たちの方向に近づいてくることで話の中に入り込める環境を作ると同時に、質問・応答を経て自分たちのしていることに楽しさを感じてもらいたいという意図があった。また、パンどろぼうが「あんぱんしょくぱん」の手遊びを入れることで真似をする楽しさや音楽に合わせる楽しさ、初めて聞く歌に出会う瞬間を味わうことができるように取り入れた。また、「まだまだだな」と煽りを入れることで恥ずかしさをなくし、手助けしてくれる人を増やすことで発声を促した。パン屋のお姉さんがパンを作る過程ではその後ろをパンどろぼうが通ることでパンどろぼうがいることを意識させ、パンを盗んでいく過程に面白みを出させた。また、パンを盗むことでパンどろぼうという役目を



(背景画像)

果たした。新たな場面の変わりや人物の登場の際にはマリンバやピアノ等を用いて1場面1場面を表現した。本番では照明を利用し、その場面の雰囲気を変えたり、マイクを通してナレーションを加えるなど登場人物だけでは表すことの出来ない細かな部分や設定も最大限に引き出すことが出来た。

(執筆者：原武 玲菜)

(5) 言葉とセリフ

パンドロぼうの2人のセリフを決める時に、パンドロぼうをどのくらい悪いどろぼうにするのかや、パンドロぼうがどういう口調で喋るのかをみんなで話し合って決めてからセリフ決めを行った。また、パンドロぼうは本来1人でパンを泥棒するが、今回の劇場ではあえて2人にして2人で対話をするような形で話を進めていったり、2人で協力してパンを盗みに行くようにした。パンドロぼうを2人にする事で1人では出来ない対話や協力してパンを盗むところなどセリフを聞いている観客も一緒に参加できるような気持ちになったり、楽しみながら劇を見てもらえるようなセリフや動きにした。そして、観客を巻き込む際には、観客をどの視点から巻き込んでいくかを決めることが難しくとても悩んだ。その結果、今回のこのパンドロぼうと言う絵本はパンドロぼうが主人公で、パンになったりパンに隠れたりしながら、パンを盗んで食べるという内容で、この劇を見ている観客の人たちは全員を主人公の「仲間」として参加してもらい、体を使って自分の好きなパンになってもらって、後ろからやってくるパンドロぼうたちから「これは何パンだ？」などと質問された時に自分の好きなパンを答えてパンドロぼうと対話をしてもらい、パンドロぼうと対話してパンドロぼうの劇の世界観に引き込んだり、パンドロぼうと話すことを楽しんでもらうようにした。その後は、ステージ上のパンドロぼうと一緒に「あんぱん食パン」の手遊びをして、一回目の時に手遊びが終わってから、パンドロぼうが「まだまだだな」と言って、もう1回みんなで手遊びをするようにして、1回目にパンドロぼうたちが手遊びをしたのを見て2回目はステージを見ながら手遊びの真似をしてもらう形で観客側も参加できるようにした。最後に「パンドロぼうはもうパンドロぼうではありません。立派なパン職人になったのです」とナレーションを入れることでその後のパンドロぼうの姿を知ってもらえるようにした。今回パンドロぼうの劇をするにあたってセリフや話の構成など、楽しく参加して貰えるようなセリフに着目してセリフ決めや動き、内容決めをすることができたと感じた。

(執筆者：山口 愛可)

(6) 動きと身体表現

子どもたちに好きなパンを体で表現してもらったり、出演者と一緒に手遊びをしてもらったりして、子どもたちが動けるように工夫した。好きなパンを体で表現する時には、子どもたち一人ひとりが自分の好きなパンを自分が思うような形で表現するようにした。また、パンドロぼうと手下役が話しかけに行き出演者側との会話ができるようにした。劇への参加という目的のためにも行った。出演者と一緒に手遊びをしてもらった時には、動きも身体表現も促した。裏方の2人が手伝いという形でパンドロぼうたちの両側に出て、真似をしながらの手遊びがよりやりやすいようにした。手遊び自体は、子どもたちに人気があり、どの年齢であっても十分にやりやすく、楽しめるものにした。物語とのつながりとしても十分なものだった。「一緒に歌ってみよう」と言うセリフを入れて、全身の動きを促すこともした。

全体的に出演者側がたくさん動くことで、子どもたちのテンションが上がったり、物語が盛り上がりやすくなるように工夫した。テンションが上がると物語としても盛り上がり、自然に体も動きやすくなると思った。

子どもたちの動きとしては小さいが、パンドロぼう達がパン屋さんの後ろでクルクル回りながら通るところでは、子どもたちが指を指して「あそこにいる」と叫んだり、思わず立ってしまったりしてパン屋さんに伝えようとすると考えて取り入れた。子どもたちの劇への参加という面でも取り入れた。手遊びや好きなパンを体で表現することを取り入れていたため、子どもたちは楽しみながら身体表現をすることができていたと考えた。

客席の目線ではパンドロぼうとその手下という役がおもしろいため、そこを十分に使い、子どもたちの動きを促すことが出来たのではと感じた。また、手遊びや好きなパンを体で表現することを取り入れていたため、子どもたちは楽しみながら身体表現をすることができていたと考えた。

また、パン屋さんやパンドロぼう達が「何パンになっているのか」を聞いて回ったため、その会話の中でも子どもたちの身体表現を促すことが出来たと考えた。

(執筆者：大田 杏)

(7) 音と音楽

パン泥棒が出てくるときに、ピンクパンサーのオリジナル1をピアノとマリンバで弾いた。パン泥棒の様子を見ながらピアノとマリンバでテンポを合わせながら弾いた。

パン屋のお姉さんたちが開店準備をしている際に楽しくワクワクした気持ちで開店準備をしているのが子どもたちにも伝わるようにする為にピアノで楽しいねチャチャチャを弾いた。

パン泥棒が座席の後ろから来た時に、ピンクパンサーオリジナル2を弾いて、パン泥棒が前に来るまで弾き続け、パン泥棒が前に来たら、ピアノとマリンバを弾くのを終える。

パン屋のお姉さんたちがパンを作っている時に、パン屋さんにおかいものに来るお客さんのことを思い浮かべてパン作りをしているのを子どもたちが感じ取れると良いなというような思いを込めてパン屋さんにおかいものをピアノで通常よりも小さい音でBGMくらいの音量で弾いた。

パン泥棒がパンを食べて「まずい」と言った時に、落ち込むオリジナルを弾いて、パン泥棒が「まずい」と言いながら音楽に合わせていた。落ち込むオリジナルもどれがいいのかを練習の時から考えて、本番に弾いたのをリハーサル終わりにみんなが良いと思ったのを弾いた。

魔女が魔法をかけた時に、ウィンドチャイムを鳴らす予定が鳴らしていなかった。でも、ウィンドチャイムを鳴らさなくても、パン泥棒や魔女がカバーしてくれていた。でも、良かった。

魔女の魔法をかけた後のパン泥棒がパンを食べたときに、ピアノで鳴らした。ピアノを鳴らして、パン泥棒が美味しいパンになったのかをまた食べて、「美味しい」と言った時に、ピアノで鳴らした。タイミングが少し難しかった。

舞台上にいる人がはけた時に、カントリーロードオリジナルをピアノとマリンバで弾いた。ピアノもオリジナルで弾いてとても難しかった。本番までに沢山何回も練習して、とても良かった。本番はミスらなくてマリンバと合わせることも練習して、とても良かった。マリンバと合わせる時がとても難しかったけど、本番は、お互い息を合わせて綺麗にできたので良かった。

(執筆者：岡 紗衣・原 ゆきみ)

(8) プレ幼教こども劇場における子どもの姿と省察

プレ幼教こども劇場をして、子どもに「なんのパンを作ろうか迷っているんだよね」と言った時にパンの名前を答えてくれていたのに反応をせずに次に進めてしまっていた。そして、子どもに立ってもらうタイミングを間違えた。また、これは何のパンでしょうとクイズをする前に立たせてしまったから、前を見ずに自分でパンの形を表していた。その後、子どもたちに好きなパンを聞いたときに「蒸しパン」や「メロンパン」など色々なパンの名前が出てきた。そして、子どもたちが体を使ってパンの形を表すときにタイミングが難しかったから体で好きなパンを表現することが分からずに困ってしまっていた子どもの姿も見られた。また、子どもにパンになってと言う前に先に子どもがパンの形を体を使って表していたので、その子がみんなのお手本になるよう注目して賞えるような声掛けをすればよかったが、それも対応することが出来なかった。その後も「なんのパンの形」や、「丸いパンだね」など子ども一人ひとりに聞いてみたり、反応をすることが出来なかった。活動と活動の間でざわざわしていたまま話を始めたので全体に話が聞こえていなかったと思う。パンを作る時に何の材料がいるのかを聞いた時に絵を見て答える姿が見られた。また、材料を混ぜるときに子どもも一緒に手を回してぐるぐるした。あんぱん食パンの手遊びを一緒にした。スピードを早くしたときについてこようと頑張っている子どもや前を見て動きが止まっている子どもがいた。

一度立った後、座らせないで立ったまま進めていた為、他のことに興味が向いていた。座りたがっている子どもがいた。最後は話を聞かずに子どもたち同士で遊び始めていたので、座ってもらって話が聞きやすい雰囲気にした方がいいと思った。

プレ幼教こども劇場を終えての反省点は、活動の切り替えができていなかったり、話し始めるタイミングが難しく、子どもたちの興味を最後まで引くことができなかったことだと思う。

(執筆：高倉 潮菜)

(9) 取り組む過程での改善と工夫

本番に実践したストーリーは当初に考えていたものとは違い、一から考え直した。初めの役は、ぱんどろぼう2人パン屋のお姉さん4人子ども1人魔女1人演奏2人ナレーション・映像1人だったがパン屋のお姉さんが2人にそして裏方が加わった。役の人数が変わったと同時に演じる人も変わった。他のグループより人数が少なかった為役を増やすことができず、同じ役に何人もいた。だが色々あり、演じる人も変わった。話し合いをしたり先生にアドバイスを頂き、子ども達と関わる演出を増やしたりした。ぱんどろぼうに印象を付けるためポーズを加えた。登場する度に同じポーズをして動くという工夫をした。ぱんどろぼうが出てくるのを舞台だけではなく客席側から登場して子ども達に何のパンの形をしてるか好きなパンを聞いたり子ども達と関わりながら舞台に行き、「あんぱん食パン」という手遊びを一緒にして関わりを入れた。パン屋のお姉さんが子ども達と関わっている時にバレないように出窓から顔を覗かせたり、後ろで音を立てたり回転しながら出てきたりと子ども達が興味を持つ動きをした。セリフも口調を変えたりセリフを言う時に動作を付け加え強調したりした。「まずい！」というセリフがあるが最初は「まっずー！」と言うだけだったが「まずい！」と言いほんとにまずいんだと見て分かるように膝から崩れ落ちたり手が震えたりなど全身を使って表した。2人共同動作で「まずさ」を伝えるのではなくバラバラで表すのもアドバイスにより得たアイデアだった。原作にはいない魔女を取り入れ、魔法をかけて美味しくするというオリジナルを加えた。絵本ではパン屋の店主にバレないように移動したり振り向いたら隠れて止まるなどしていたが私達は、店主をお姉さんにし隠れながらではなくバレずに堂々と煽るという工夫をした。原作は見られたら隠れを繰り返し、「だるまさんがころんだ」の要素を入れていたがそれだけでは物足りないなと思いあえてお姉さんを煽るという要素を足した。ぱんどろぼうだけでなくパン屋のお姉さんも子ども達と関わる事ができるよう

に舞台からおりて子ども達へ好きなパンは何か聞いていく事を付け加えた。最後に「パンどろぼうはもうパンどろぼうではありません。立派なパン職人になったのです」という、どろぼうから職人へと変わったパンどろぼうのその後を分かりやすくナレーションで伝えた。

変更した点・改善した点

これまでの練習やゲネプロの時	本番で変えたところ(改善)/良かった点
<p>《役数》</p> <p>パンどろぼう2人・パン屋のお姉さん4人</p> <p>《パンどろぼうが出て来て去る場面》</p> <p>舞台袖左右に別れて登場し、セリフを言ってどちらかにはける。</p> <p>《パン屋のお姉さんが出てきて去るまでの場面》</p> <p>黒幕が上がりきってから急いだ様子での登場。</p> <p>パン作りに必要な大切なものを忘れたと言って2人ずつに別れて机を持って去る。</p>	<p>パンどろぼう2・パン屋のお姉さん2人・裏方2人</p> <p>→役割を増やし、人数を減らしたことでセリフの変更が大幅に増えた部分もある。しかし、人数が2人ずつになったことで機転が利き、劇がやりやすくなった。</p> <p>音楽がなった後で腰を低くしての登場。(舞台袖左右は変わらない) ポーズを決める。 セリフを言い、1人が指差した方に2人ともはける。</p> <p>→登場の振りを大きくし、決めポーズを取り入れることで頭の中で話の内容を理解出来る時間を作り、笑いのポイントを引き出すことが出来た。 はける方向を統一することで次の場面への移動に余裕を持たせることができ、他の人の動きを把握しやすくなった。</p> <p>黒幕が上がると同時に音楽が流れるため、ゆっくり歩きながら登場する。</p> <p>→ゆっくり歩くことで演者側の気持ちを落ち着かせると共に、音楽隊の音楽を終える境目が分かるようになった。</p> <p>形を覚えておくための記録用紙を忘れたことを伝え、ちょっとまっててねと急いで取りに行く(すぐに戻ってくる)という臨場感が伝わるような声掛けをし、去る。(裏方2人が機の回収(本番はできていない。その予定だった。))</p> <p>→まず、話の前提としてパン作りに関する忘れ物は話の内容的におかしいため、紙と</p>

<p>《会場後方からのパンどろぼうの登場》</p> <p>何パンになっているのかを聞きながら壇上に上がる</p> <p>《2度目のパン屋のお姉さんの登場》</p> <p>重い小麦粉を持ってくるも、1人では移動させることが出来ず、4人で協力して中央の机に乗せる。</p>	<p>ペンを取りに行くためにいなくなるようにしたが、そうすることで、その後の場面に移行した時に必要になる子どもたちや客席の“パンの形”を継続できた。また、机はそのままになってしまったが、おかしな動きを無くすことが出来た。</p> <p>舞台に近くなると手遊び歌を歌いながら壇上に上がる。また、声が小さいと煽る。</p> <p>→歌を歌いながら舞台上に上がることで、子どもたちもいない場所を歩いている時間を楽しい時間に変えることが出来た。また、歌の楽しさで会場の空気を明るく出来た。</p> <p>それぞれ紙とペンを持って「紙とペン持ってきたよ～」と言いながら客席側を見る。子どもたち全員が座っていることに気づく。</p> <p>→忘れ物を持ってきたけれどみんなが座っているという笑える場面を作ることで場の空気を馴染ませるとともに、演者側のセリフからパン作りの工程を知ることができる</p>
---	--

(執筆者：大薮 桃加・原武 玲菜)

(10) 幼教こども劇場での子どもたちの様子と省察

まず舞台袖から音楽とともにパンどろぼうが登場した時に何が始まるんだとガヤガヤしていた。パンどろぼう2人の被り物に目がいついた。セリフを言った後にポーズをする時に「シャキーン」と効果音を言ってしまった時に笑っていた。とても恥ずかしかった。お姉さんが出てきて舞台におりて好きなパンを聞いた時に「メロンパン」「クロワッサン」などと答えていた。友達と話して答えたりしていた。パンの形を忘れたお姉さんが子ども達にパンの形をして欲しいとお願いした時に一生懸命パンを体で表していた。客席側からパンどろぼうが登場した時何処から登場したか分からずキョロキョロしていた。パンどろぼうがなんのパンの形をしてるか聞いた時恥ずかしがりながらも答えていた。舞台に上がる時に「あんパン食パン」の手遊びをしながら上がり、「いい歌だろう？パン仲間たち一緒に歌うぞ！」の掛け声と一緒に手遊びをしてくれた。私たちの考えでは立ったまま手遊びをする予定だったが自分達から座り、手遊びをしていた。私たちが声をかけなくても自分達で考えて座ったので驚いた。パン屋のお姉さんが出てきてパンを作り始めた時に真剣に見ていた。途中、出窓からパンどろぼうがお姉さんにバレないように左右から顔を出した時は驚いていた。「あそのにいる！」と言ったり指を指したりしていた。お姉さんが生地をこねると同時に後ろでクルクル回転しながら出てきた時にザワザワとしていた。後ろにいるなど声をだしたり笑ったりしていた。お姉さんが作ったパンを奪い走り去ってそのパンを2人で分け食べた後「まず

い！」と言い、音楽や全身を使って「まずい」ことを表現してる時に笑っていた。魔女が登場した時に驚いていた。魔女とのやり取りを見て笑っていた。魔女の掛け声の後に「おいしくな〜れ！」と魔法を一緒に言った。パンを食べ、「美味しい！」とパンどろぼうが言っていた時に「フっ」と微笑んで見ていた。美味しいという声を聞いた村人が来てパンを分けてもらい食べた後に「美味しい！」と言いながら抜けて行った時「え？」と驚いていた。私達も驚いた。パンどろぼうがパン屋になったら遊びに来てくれるか聞いた時「いいよー」と反応してくれたがパンどろぼうが「聞こえないなー？遊びに来てくれるー？」ともう一度聞くと大きな声で「いいよー！」と言ってくれた。最後に退場する時に手を振って見送ってくれた。



(執筆者：大薮 桃加)

5. 取り組みを通して学んだこと、得たこと

【大田 杏】

こども劇場を終えて、私は十分な劇ができたとは思えなかった。グループ内が2つに別れてしまい、仲違いが起こったためだと思った。話し合いがなかなか進まず、最後の方にいろいろ変更することになってしまったのは、これが原因だと思った。この仲違いを止めるような努力くらいはすれば良かったと後悔した。私は話し合いをして追加した、パンを美味しくする魔女役をした。前日の夜にセリフを変えたためしっかり覚えることができなかつたり、緊張があつたりして、言葉遣いや内容を変えて言ってしまった。しかし、セリフを変えた際に指摘してもらった、「パンには愛情がこもっていないから美味しくないと」いうことを心掛けて演じることはできたのではないかと感じた。魔女役は子どもたちと対話をする部分が

あるので、客席の方を見て子どもたちに話しかけたり、反応を待ちながらセリフを言ったりした。私はステージに立ったり、劇を見たりするという経験をあまりしたことがなかったため、いい経験をしたと感じた。ステージ側が明るいため出演している人からはあまり客席の人が見えないこと、セリフを言う時はハキハキと大きい声で言わなければ聞こえないと知ることができた。客席側の笑い声を聞くことができたので良かったと感じた。

【大藪 桃加】

こども劇場を終えて、とても良い経験をしたなと感じた。自分としてはリーダーとして頑張ろうと思っていたが実際には何も出来ず、私がリーダーでいいのかと何回も思った。題材とする絵本を決める時も授業を抜いたりスマホを触ったりなど全然進む気配がなく焦っていた。徐々に決まって行き準備が進んでいく中一部の人が手伝わずに話ばかりしていたりしてイライラしたりもした。完成が近づくにつれてメンバー同士で亀裂が入り始め、リハーサルやゲネプロの時はボロボロの劇だった。リーダーとしての気持ちをあまり持てずにのりゆらり行っていた為、自分は大丈夫だと思っていた事がメンバーから見ると違ったかなと思った。こんなのを子ども達や保護者に見せるのかと落ち込んだ。もう無理だと感じた。元々人前で何かをしたりするのが苦手だったから1人でパンドロぼうをやった時、言われた事や考えていた事がすべて吹っ飛び頭の中は緊張と焦りと不安でいっぱいだった。皆から注目されている、見られていると考えるだけでパニックになり心が砕けそうだった。リハーサルやゲネプロが終わった後に不安や焦りが爆発したのか涙が出てきた。けどこのままではダメだと放課後残って先生からアドバイスを貰いながら夜遅くまで練習をし本番を迎えた。本番ではメンバー同士でカバーし合いリハーサルやゲネプロよりいい劇ができた。諦めずに最後までやり遂げることができて良かった。終わった後に他のグループの人たちから「お疲れ様!」「面白かったよ!」「頑張ったね!」と言われてとても嬉しかった。自分の性格上人に指示をすることがほんとにダメで、でも気持ちを汲み取るのは得意でよく板挟みにされる事が多かった。今回も相手の性格を分かっているから刺激しないようにどう伝えるか、どうやったら分かってくれるかなど頭を色んな事で使った。劇場の準備期間の間はほんとに疲れが溜まっていたのか寝ても寝ても眠く、授業が始まった途端不安やイライラに吞まれていた。私は普段怒ったりする性格では無いので初めてこんなに怒りを露わにする出来事だった。今回の劇を通して、良い部分も悪い部分も経験することができ「話し合い」が1番大事だと理解することができた。自分の考えを一部の人だけに伝えたり、どうせ何もしないからと伝えなかったりと情報が共有されていなかったのも原因の1つかなと感じた。本番までとても大変で早く終わってくれないかと何度も思ったが終わったら一瞬で準備期間で色々ありすぎて長く感じていたんだなと思った。とてもいい思い出になったし、経験にもなった。

【岡 紗衣】

仲良いメンバーでして仲間分れもしてグダグダになっていて、それでも、練習をして色々修正しながら色々修正した後練習をし、ピアノやマリimbaを使うことでどんな時にどんな曲があうのかを色々手探りで探した。他の人の意見も入れていたけど、色々と言われて、カッとなりバチバチになっていた。主人公も決める時も、積極的に決まったけど練習とかりハーサルの時に、なかなか練習に参加もしないしまともに練習もしないし勝手に帰ったり台本を覚えてなかったりして、事前になって辞めるとなり新たに主人公を決め、色々大変だったけどリハーサルの時より良くなっていたので良かったと思う。そしてリハーサルの時に、台本を見ながらするのも良くないと思った。覚えてくるように早めから台本を作っていて、覚えて来るように頼んでいたのにそれもしなくて、まともに練習せずに帰りたいと言う欲をずっと言っているのもおかしいと思った。そんなことに迷惑をかけていると気づいているのかは分からないが、周りにかなり迷惑をかけたと思うなら本番勝手に出てこなくていいところに出てくるのもおかしいと思うし、そんなに出たいのであればなぜ練習をしてこなかったのかってなると思う。勝手に色々出てこられてこちら、大変困った。

自分勝手にしている、周りの迷惑にもなるのに、それもわかってないとかどうかと思った。そして、色々も気持ちをぶつけ合いながらも、練習してきて、成功？したので良かった。色々、考えていて、音楽も色々悩みながら考えて、色々変えられた時は、「自分たちでしたら？」という思いが溢れて、言葉にして言って、色々迷惑かけたけど、自分が考えたのを他の曲に変えるのは、とても嫌で、自分たちでしたらいいと思った。何もかも言われて、色々病んだりしてたけど、切り替えながらして、ホントに色々あった練習だった。仲良いからこそ、言葉をぶつけても、相手の気持ちが分かっているし、相手の対応の仕方もわかっているからこそ、言い合えると思った。急遽、主人公が変わった時に、最初に言った、あの言葉は、「なんやったん」と思った。最後まで責任を持って欲しかった。新たに、主人公が決まり、オリジナルもいれながら、考えたり、音楽も少し考えたりした。色んなことで、みんなが動いていたのを主人公から裏方に回った人たちの気持ちに心が刺さってくれたら嬉しいと思った。主人公が変わっても、放課後の練習や当日の打ち合わせもちゃんと取れていたのが良かった。色々大変だったけど、このグループで、できたことに感謝してる。心からありがとうって思った。自分のピアノの練習もして、リハーサルの時に、初めて音楽とステージに出る人で合わせることの難しさを知り、早めから取り組んで、悪い所を治すということがあればもっと良かったけど、ギリギリになって、色々変えて、解決もでき、色々対応することが出来たので良かった。最初は、心配と言うことがとても不安や心配になった。色々解決や不安や心配あるなかで上手く出来て良かった。仲間分れをしても、みんな協力出来て良かった。色々あったけど、協力して、みんなで楽しんでよかった。本番も少しグタグタになったけど、最後までやり遂げたので良かった。

【塩塚 彩夢】

幼教こども劇場を終えて、何ヶ月も前からグループ分けがあり、その時は何も考えず誰となってもいいと思っていた。しかしこのグループ分けが結構大事になってくるとは思ってもいなかった。練習が少しずつ始まっていき、グループのリーダーにはとても迷惑をかけた。しかしリーダーは私にしなくては行けないことを優しく丁寧に教えてくれて私がこのグループにいる意味を教えてくれた。

子どもたちの前にいざ立ってみると緊張して何をしたいか分からないが先生方の事前指導で子どもたちの反応の事や、どうしたら楽しんでもらえるかなど指導してもらいそれを元に試行錯誤を繰り返して何回も練習をした。

ぶつかり合いを何度もして本番直前もその後もギスギスしていたが言い合いができるからこそ話し合いもできたと思うし、「やって良かったな」と思えるようなグループで本当に良かった。去年はリモートで先輩たちを見て「こんなものか」など余裕ぶってたらすぐ1年なんか来て、私たちの出番でもっと真剣にしておけば良かったなどの反省もある。

でもこの大谷こども劇場をやって本当に良かったし、楽しかった。みんなで協力して発表なんてもう大人になり就職するともう出来なくなるので本当にいい経験だったと思う。

【篠原 ひなた】

幼教こども劇場に取り組むにあたって、私はまだまだ先のことだから大丈夫だろうと楽観的に物事を決めてしまっていて、グループ分けも適当に仲良い人間同士でなればいだろうと軽い気持ちで取り組んでしまっていた。しかしそれが裏目に出てしまい、パンどろぼうの物語を理解しようとせずに、授業もただぼーっと過ごしていたり、劇の物語のあらすじや登場人物などの設定も全て人任せにしまっていた。そのような事が積み重なり、メンバー内で喧嘩が起こってしまっていて、言い合いになってしまったりして仲間割れをしてしまったけれど、そんな私を見捨てずに今までの行動をしっかりと伝えてくれて、正してくれたメンバーやリーダーのおかげで今回の劇である、「パンをとったのは誰だ〜!？」を成功へと導いたのではないかと感じた。メンバーの誰かがやってくれるという軽率な考えではいけないのだと実感した。そして、もっと早い段階で切り替えることが出来ていたら、今回の劇は

もっと素晴らしいものにできたのではないかと反省している。しかし、マイナスなことだけでなく、やっぱりみんなで協力して成し遂げることが出来て、とてもやり甲斐を感じたし、楽しかった。良い面でも、悪い面でも、良い経験になったと実感している。

【高倉 潮菜】

幼教こども劇場を通して学んだことは、グループの間でのコミュニケーションや役割分担をすることの大切さです。全体での話し合いが出来ておらず、誰が何をするのかを決めることが出来ていなかったと思う。なので、全体での共有が大切だと学んだ。1人やふたりだけがやらなければいけない事を分かっている他の人は分からなかったら先に進まず、グループの中での問題が起きてくると思う。何かやろうと思っていても何をしたらいいのか分からず止まっていたら、「この人は何もしていない」と、グループの人から思われてしまい誤解を生んでしまうことにつながると思った。そして、時間に余裕を持って行動することも大切だということも学んだ。早く何事も始めていれば心に余裕が出来たり、何か足りないといったときに何が足りないのかを考え改善することが出来るので時間には余裕を持って行動したほうが良いと思った。何事でもギリギリに取り組んでいたのが余裕がなく、焦りがでていたと思う。焦っていてもいいものは作れず、ぐちゃぐちゃになってしまうので事前に余裕を持って完成ができるような計画を立てておいたほうが良いと分かった。

幼教こども劇場をして、臨機応変な対応をすることが出来ていたと思う。子どもに好きなパンを聞くときに子ども的人数が少なかったため、ステージの上から聞くのではなく、自分たちがステージから下りて、聞きに行くことに変更をすることによって、みんなの前で大きな声で発言をすることが苦手な子どもでも答えることが出来ると思ったので、劇が始まる前に変更をし、子どもとの関わりを楽しむことができたと思う。今回の幼教こども劇場で、グループでの役割分担をし、協力をして取り組むことや時間に余裕を持って行動すること、臨機応変な対応をすることの大切さを学べたと思う。

【成田 梨杏】

今回の幼教こども劇場を通して、人との協力・連携の大変さについて学ぶことが出来たと思う。今回の作品はどの絵本を題材にするのか、舞台上で使う道具は何か必要なかを話し合い、役割分担を行ったことで作品を作る上で必要なことや自分がすべき作業等を行うことが出来たと思う。舞台上に設置する大道具や小道具と一緒に製作を行うメンバーと相談したり作り方を確認しながら製作することが出来たと思う。だが、スクリーンに写す絵が提出期限に間に合わない等焦る状態にもなった為、先生に相談し、期限日以内に何とか提出することが出来たけれど雑に描いてしまっていたから今思えば、その時に手が空いている人に頼んでも良かったのではないかと考えた。また、リハーサルでは緊張により台詞が飛んでしまったり、練習不足で終始グダグダになってしまっていた為、本番もダメなのかと感じている自分がいた。リハーサルの日に役柄の変更があり、覚える台詞量が増えてしまい焦っていたが夜まで残って先生とどのようにしたら作品の流れが良くなるのか等を相談したりアドバイスを頂きながら自分が演じる役(パン屋のお姉さん)の台詞を変更して本番に望むことが出来たと思う。本番では、前日の内容をほとんど変更して作品の内容を伝え、子どもたちが楽しめるように言葉掛け等を意識したので、参加していた人も笑っていたり言葉掛けに対して応えてくれている部分が多かったから不安だったけれど成功したのではないかと考えた。子どもたち的人数が少なく、最初の方は恥ずかしさや不安を感じている子どもたちが多かったのではないかと、客席に降りて言葉掛けをしたことで自然と声を発したり身体で表現するところなど楽しく参加出来ていたと思う。最初の段階からグダグダの状態ではあったり、やる気のある人とない人の差が大きかった部分もあり本番まで不安や焦りが大きかったけれど、出来る人が率先して動いてくれたおかげで自分も心折れずについて行くことが出来たと思う。役割分担を決めたら自分の役割を果たすことが出来るように手が空いている人に協力を仰いだ

りまた、出来ないことはできる人に任せて、自分の出来ることを積極的にやっていくことが協力・連携に繋がるのではないかと今回の幼教こども劇場で身に染みて感じた。

【原 ゆきみ】

幼教こども劇場を通して、学んだことは自分の心にゆとりを持つことの大切さだ。自分がやらなければいけないことに精一杯で「次は何をしなければならぬ」等と自分のすることしか頭の中になく、子どもたちの反応や行動等を周りを見て観察するということがあまりできずに幼教こども劇場を終えてしまった。本来ならば、自分がやらなければいけないことは頭に入れた上で心にゆとりを持ち、子どもたち一人ひとりの発言や行動を観察したりして一人ひとりの子どもの声を聞き、こちら側もその声を拾い反応を返す等といったものを自分の中では考えていた。しかし、本当に本番当日の前日までマリンバやピアノがギリギリの状態子どもたちの反応を見るまでもなく、不安の方が強く入り混じり、自分の心に余裕がなく全くもってゆとりを持つことができていない状態だった。そのため、もっと自分の中で心にゆとりを広く持っていればきっと子どもたちの反応を多く見ることができ、新たな気付きもよりあったのではないかと振り返ってみて思った。幼教こども劇場に限らず、他の場面例えば実習等であっても心にゆとりがあるのとないのでは子どもたち一人ひとりに目を向け小さな細かい部分にも気付く等と多くの差が出てくるのではないのかと思う。そういった点から、普段から心にゆとりを持ち何事にもゆとりを持って行動する・取り組むことが大切だと幼教こども劇場を終えて深く学んだ。

【原武 玲菜】

今回の幼教こども劇場の活動を経て、初めはこのままで大丈夫なのだろうかと思う場面が多々あり、本番までの不安は大きかった。私たちのグループは絵本を決め直すことになったということもあったと思うが、取り掛かりが遅かったと言われてもしょうがないと思えるほどぎこちなくグループ活動が始まった。グループ内のメンバーの中にはどうにかなるでしょというような感覚の人もいたと思う。グループ内での活動の中で、「子どもたちの参加をどのように促すのか」や「それぞれ決まった役の中でどのように動いていくことがいいのか」など決めなければならぬことが次から次に出てきて思っていた以上にひとつの物を作り上げる大変さをとても身に染みて感じた。話の内容や役割、動き方・制作物などがなかなかまとまらず、前日まで上手くいかなかった。参加しようとする人と少し他人任せになってしまう人の中でそれぞれにイライラが募りグループ内に亀裂が入ってしまった。このままの状態でも本番を迎えてもいいのかと思うことも多かった。このままではいけないと話し合いをし、主役の変更セリフの覚え直しをした。前日になり多くのことが変わってしまい不安な気持ちは大きくなっていった。本番前の緊張も相まって失敗に終わってしまったらどうしようという気持ちはあったが、実際に本番を迎えてみるとお互いをカバーし合いながら「パンを取ったのはだれだ!？」を無事成功させることが出来た。それに、本番となればあたふたしてはいられない。舞台上にあがっている時間は子どもたち・観客含め自分たちを見ている。そんな中で分からない・できないといった呑気なことは言っていられない。やるしかないという気持ちで子どもたちの声や客席の様子を見ながら「対話すること」を意識した。本番当日の午後の部は学生の人数に比べて子どもたちの人数が少なかつたため、こちらから子どもたちの方へ関わりを持ちにいこうという事になり、その場で臨機応変に対応した。その結果、子どもたちは手マイクを通して悩みながらも発言してくれた。舞台上で「何が好きー？」と聞くことは簡単だが、広い会場の中、静かな雰囲気の中で発言することは難しいことだと思う。子どもの立場で考えてみると、そのような状況の中で何かを聞かれたとしても「言っているのかな？みんな言っていないし...」と戸惑いの感情が出てきてしまうと思う。臨機応変に対応しながら進めていくということは難しいことではあるが、楽しめる場所を提供することは、人と人との距離を縮め、楽しさを共有することが出来る一番の近道なのではないかと思った。子どもの声を聞くことの大切さを知ったと同時に、考えていることが上手くいかな

いこともあることを改めて体感した。今回の活動を終えて、みんなの笑い声や反応を貰えたことが一番嬉しかった。前日とは比にならないくらいの完成に近い出来上がりを披露することが出来たのでは無いかと思う。そのように思うことが出来たのも、最終的にはグループが協力出来た結果なのだと思う。最後の最後まで諦めずに活動することが出来たことはこれからの保育現場でも、役立つのでは無いかと思う。今回の活動を通して、改めてそれぞれが同じ物に向き合い、協力し、ひとつの物を作り上げる大変さや大切さを学ぶことが出来た。

【山口 愛可】

今回の幼教劇場での「パンどろぼう」を通して、メンバー同士での役割の分担を行ったが、それを実行してくれない人と実行してくれる人との差がすごく、実行してくれる人は早くに道具が出来上がったが、実行してくれない人の道具がなかなか出来上がらなくて、結局実行してくれる人と4人で昼休みや放課後など自分の時間や睡眠時間をけずってすることになったりして準備をしてくれる人の負担がとても大きかったと思った。また、リハーサルでは、ボロボロ過ぎて1部のメンバーが台本を渡していたのに対して覚えていなかったの、練習をしてる人と全くしていない人の差が前日のリハーサルの時点で歴然だったと思った。また、リハーサルで初めて全部を通したのは練習不足だったとリハーサルを通して改めて感じた。結局リハーサルの後に、主役を急遽変わるようになって、夜8時頃まで居残りをして練習をして先生と話し合いをして、子どもが楽しめるようにパン屋のお姉さんがパンを作っている時に後ろで煽ってみたり、クルクル回って横切ってみたりと子どもたちが見つけて「あ！あそこ！！」となれる動きを考えました。また、パンを奪って2人で食べる時にどうやったら「まずいっ」というシーンを印象に残すことが出来るかや、言葉だけでなく音楽やパンどろぼう2人の身体の動きで伝わるかを考えて、動作や音楽の構成を決めた。本番では、そこが面白かったのか、子どもたちや1年生や2年生の生徒の人たちも笑ってくれて、面白くして印象づけたいという狙いが達成出来たのではないかと思った。パンどろぼうの絵本は内容も面白く、この絵本を読んだことがあったり、知っている人も多いと思うが、知っている人も知らない人も楽しめるような話にしたり、話の内容が就学前の子どもたちにも充分理解でき、内容を楽しんでもらいたいと考えていて、物語の中で、パンを盗みにはいる時にパンに隠れたりする所をもっと堂々とパン屋のお姉さんたちを煽ってみたり、後ろで大きな音を立てたり、クルクル回りながら後ろを通ってみたりと色んな楽しくなるような動きをして、観客の子どもたちに見つけて貰ったりするようにアレンジをすると、子どもたちに「あ！あそこにいる」と見つけて貰って、楽しんでもらったり、興味を持ってもらえたと思った。また、盗んだパンを食べたパンどろぼうが「まずい」とショックを受けている場面は、ショックで絶望している様子を膝から崩れ落ちたり、全身を震えるような表現と、絶望をした時の音楽を合わせると見ていて面白いと思ってもらえる表現を考えた。そして、今回劇をするにあたって作者の絵本に対する思いを調べて、作者の思いを知った。「パンどろぼう」は「ドジで失敗しながらも頑張る主人公」を描いているそうで、子どもたちには「好きなこと、夢中になれることを見つけて、諦めないで」と作者の柴田ケイコさんが絵本への思いを知り、劇でも作者の思いを少しでも感じてもらえればと思いながら本番に挑んだ。